

俺の父
ちゃん
は
松田陣平

俺の父ちゃんは松田陣平

有明
風鹿

有明 風鹿

見た目は子供。頭脳は大人になりかけの松田陣平の息子、松田翔平。元は高校生だったが気がつけば松田陣平の息子に転生していた！？「名探偵コナン」なんて映画くらいしか知らねえよ！でも父ちゃんたちは生きてるし、俺が知ってる世界とはちょっと違うかも？なんかよくわかんねえけど、こうなったらしかたない！全力で楽しむとしますか！

爆弾解体技術を習得したり、コナンと一緒に事件を解決したり、父ちゃんを胃痛に悩ませつつ日々を謳歌するドタバタ原作沿いストーリー！

本編七話に加え、オリジナル書き下ろしを二本収録。

DETECTIVE CONAN
UNOFFICIAL DREAM FANBOOK
PRESENTED BY BLUE ROSE



[Main story]

・俺の父ちゃんは松田陣平	4
・爆弾見つけたらまず父ちゃんに電話しろ	14
・遊園地には身長制限があるんだぜ。知ってた。	39
・不法侵入？僕小学生だからわかんない	50
・結成！少年探偵団！ご依頼はこちらまで→	72
・中の人が外の人ってどーいうこと！？	93
・全力で拒否したかった摩天楼への招待状	115

[Extra edhition]

・世の中言わなくていいこともある	179
・メールの宛先は今日も空欄	195
・あとがき	218

俺の父ちゃんは松田陣平

わくわくしながらベランダに置かれている椅子に飛び乗った。キャンプなどに使われる布製の折り畳みの椅子だ。しかし、子供の俺が立つても大丈夫なくらい丈夫で、父ちゃんも俺もすぐ気に入っている。これは、父ちゃんや父ちゃんの友達たちがゆつくりとタバコを吸うために設置されたものだ。彼らは子供である俺の前では吸わないように気を付けてくれている。俺自身はあまり気にしていないが、受動喫煙がどうか言っていた。良識ある大人の意見だと思う。

不安定な椅子の上に立ち、背伸びをする。そうすることでようやく道路を覗ける俺の身長は平均より少し低いらしい。父ちゃんは背が高い方だから、きっとあれくらいまでは伸びると信じている。

道路には多くの車が行き交い、歩道には子連れの家族が一組と、ランドセルを背負った女の子三人がいる。女の子たちの楽しそうな甲高い声がこちらまで聞こえてくる。しかし、そこに待ち望んでいる人の姿はなかった。

「乗り出すなよ」

室内から聞こえてきた声におぎなりに返事をし、まだかまだかと待ち焦がれる。

あの人がうちに来るときは家も近所だし、大抵はお酒を飲むから徒歩でくるのを俺は知っている。家の方角からして、左手の角を曲がって現れるはずだが、コンビニとかに寄るなら反対側になる。だから俺の目は忙しく右へ左へと彷徨っている。そうしてしばらくすると、ようやくあの人の姿が見えた。今日は左から来たらしい。

「はーぎーさーーん！」

「うっせえ！ 近所迷惑になるから叫ぶな！」

その姿にテンションがMAXになり、ぶんぶん手をふりまわして叫ぶ。俺の声に、ちようどハギさんとすれ違ふところだった女の子たち三人が振り返り見上げてきた。室内から父ちゃんの不機嫌そうな声が飛んできたけれど、気にしていられない。

「父ちゃん！ ハギさん来たよ！」

ちよつと怒っている父ちゃんの声なんて今は右から左へと流れていってしまっている俺は、その場でびよんぴょんと飛び跳ねながら父ちゃんに報告する。料理を作っていた父ちゃんは俺の様子に何を言っても無駄だと悟ったのか、深いため息をついてベランダへ出てきた。

俺が飛び跳ねるおかげで安物の椅子はギシギシと音を立てる。少しぐらついた体は父ちゃんに襟首を掴まれたことで倒れることを回避した。そのまま俺を囲むようにしてベランダの柵に手をついた父ちゃんが、俺の指差した方をみて、おー、と一言。それだけで俺は満足したので、再びハギさんへと目を向ける。

「はーぎーさーん！」

もう一度父ちゃんの腕の中で片腕を出してぶんぶんと振る。顔がはつきり見えるようになったハギさんが笑いながら片腕をあげて振り返してくれた。

「だから叫ぶなっつってるだろ！」

ゴチンツとすごい音と同時に脳天に走った衝撃に目の前がチカチカする。

「いてーっ！」

「何回も叫ぶお前が悪い」

ハン、と鼻で笑う父ちゃんを睨みつけるが、ニヤリと笑い返されるだけだ。頭の上にでかいタンコブができたんじゃないかと思うほどの痛みで脳天を何度か摩る。そうこうしているうちにハギさんが建物の影で見えなくなった。今からエレベーターに乗ってこの階まであがってくるはずだ。

俺と父ちゃんが住んでいるのは父ちゃんの職場からほど近い場所にあるマンションの一室だ。2LDKで俺の部屋も父ちゃんの部屋もちゃんとある。

「飯、運ぶから手伝え」

「はーい！」

父ちゃんに抱き上げられて部屋の中に入る。素直にキッチンへついていくと、途中で投げ出していたらしいフライパンの中身が皿へと移され、俺へと手渡される。それを両手で慎重に持ち、全神経を集中させながらリビングへと運ぶ。

小さな体では大きな皿を運ぶのだけでも一苦労だ。ちゃんと足元も注意しないといけない。前に一度、蹴躓いて皿の中身を全部床にぶちまけたことがある。あの時はショックで泣いた。父ちゃんはある程度、顔をしていただけた怒ることなく、さっさと料理を片付けて出前をとってくれたのはいい思い出。今回は無事にそれを机の上におき、再びダッシュでキッチンへ戻る。他のものも慎重に運んでいると、チャイムが鳴った。持っていた箸を叩きつけるようにして机に置き、俺は玄関へと走った。背伸びをして鍵を外し、はた、と立ち止まる。チェーンがかかっていた。今の俺の身長だとチェーンは届かないのだ。

爆弾見つけたらまず父ちゃんに電話しろ

いつもは目覚まし時計をいくら鳴らしても全く起きないで、父ちゃんに怒鳴られ、時には殴られながら起こされるというのに、今日は目覚まし時計よりもずっと早く目が覚めた。ぼんやりとした視界の中で時計を確認する。時計は短い針が六と七の間。長い針が六のところにあつた。まだだいぶ早いな、とは思いつながらもたまには早起きもいいもんだと考えながら体を起こす。そんなことを考えるのは三歳児らしくないかもしれないが、元は高校生だ。体は子供、頭脳は大人になりかけな松田陣平の息子として転生してから早くも三年。前世の頃からわりとやんちゃな性格だとか、ガキの頃から変わらねーよなお前、と言われることが多かったため大して苦労することも、怪しまれることもなく子供ライフを満喫している。

俺はのろのろとベッドから降りて、まだ眠気の覚めないぼんやりとした状態で、平衡感覚がままならないらしくふらふらとしながら幼稚園の制服にうんしょ、うんしょと着替えてリビングへと向かった。父ちゃんは朝ご飯を作っているらしく、キッチンからはガチャガチャという物音がする。先におはよ

うを伝えなければとキッチンへと顔を出した。それに気づいた父ちゃんが俺の方を見て、ギョツとした顔をした。

「翔平！ お前、顔真っ赤だぞ！」

フライパンを投げ出した父ちゃんが俺に駆け寄ってくる。そして首と額に触れた。その勢いに押されるように後ろに傾きそうだった体は父ちゃんの腕に支えられる。額にあてがわれた手が冷たくて気持ちいい。その冷たさにうっとり目を細めると、俺とは反対に父ちゃんの顔が険しくなる。

「かなり熱あるぞ」

深刻な顔をした父ちゃんに言われ、首を傾げる。熱なんてあるか？ 別に対して体はしんどくない。

「だるいとか気持ち悪いとかは？ 頭は痛くないか？ 喉は？」

矢継ぎ早に問いかけられるが、どれにも心当たりはなくて首を横に振った。父ちゃんは再び眉を寄せ、俺を軽々と抱き上げるとリビングのソファへ連れて行く。そこに横たえさせると体温計を持ってきて脇にさしこんできた。

「音がるまで動かすなよ」

「ん」

そのあとは寝室から毛布を持ってきてかけてくれる。そこで初めて俺は寒かったらしいということがわかった。もぞもぞと毛布を体に巻きつける。そうしていればようやく安心感を得られた。やはりいつもよりもずつとほんやりしている頭に、熱があるからか、と納得する。ずつと、まだ寝惚けているだけだと思つてた。

父ちゃんは俺の頭を撫でながらどこかへ電話をかける。

「ハギ。公休だつてたよな？悪いが翔平つれて病院いつてくんねーか？」

電話の相手はハギさんだつたらしい。父ちゃんは眉根をよせて険しい顔のままハギさんに交渉しているようだ。

しばらくして体温計が鳴り、それを父ちゃんに差し出す。腕を出しただけで少し寒くて、すぐに毛布の中に腕をひっこめた。再びぎゅつと毛布を巻きつけてみるけれど、寒さはなくならない。それが不快でさらに体を小さくしてみる。

体温計を受け取った父ちゃんが再びぎよつとする。

「四十度……。本当にどこも痛くないのか？」

「んー…、ちよつとさむい」

俺が訴えると、父ちゃんはすぐに寝室へいつてもう一枚分厚い毛布を取り出してきた。それを俺の上へとかける。重さで少し苦しいが、その分暖かくはなった。

父ちゃんの視線はカレンダーへと向けられる。カレンダーの日付は十一月七日。升目には燃えるゴミの日のシールが貼られている。新しいカレンダーが来たら燃えるゴミの日に火のシール、燃えないゴミの日に水のシールを貼るのは俺の大事な仕事だ。一年分しっかりと貼られているそれを見て、父ちゃんはゴミを出すのだ。だから曜日を間違えるわけにはいかない。今年もしつかりと貼り終えているそのカレンダーはあと少しで役目を終えることだろう。

父ちゃんは一度小さくため息をつくつと、申し訳なさそうに俺の方を覗き込んだ。

「わりーな。今日はどうしても休めねーんだ」

低く呟いた父ちゃんが俺の頭を優しく撫でる。いつもよりずつと優しいその手ににへらと笑う。

「とーちゃんのおしごとだいじ」

前は爆弾処理班だつたらしい父ちゃんだが、ついこの前新しい部署に異動になったらしい。強行犯係と言う悪い人を捕まえる部署だ。父ちゃんとしては別の部署への異動願いを出していたらしいが通らなかったらしく、それが決まった日は珍しく不機嫌そうで、ハギさんとうちで飲みながら愚痴つてい

世の中言わなくていいこともある

仕事から帰ると、翔平がなにやらメモ帳を片手に待ち構えていた。いつになく真剣な顔を向ける翔平に何があったのかと身構える。小学生に入ってからというもの、事件だなんだと巻き込まれることが増えた翔平。それによって、こちらとしては大分やきもきさせられており、翔平から電話が入るたびにまた何か事件に巻き込まれたのかと肝を冷やすようになった。もうちょつと平和に平凡に過ごせないものかと思いはするが、それはこの犯罪過多な都市では難しいのかもしれない。なにより、翔平が仲良くしている子供たちが好奇心旺盛で、やめときやいいのに自ら進んで首をつっこんでいくような子達だ。好奇心は猫をも殺すというし、いつか取り返しつかないことになんきやいいが、と思っている。

そうならないために、いつでもかけつけられる位置にいたいと今なお刑事部に所属したまま転属願いを出さずにいる。

「どうしたんだ？」

「あのね、父ちゃん。俺の名前の意味ってなに？」

「名前？」

「うん。学校の宿題で、名前の由来を聞いてきなさいって言われたんだ」

まあ、小学校ではありがちな宿題の一つだろう。いつかこの日が来るだろうことはわかっていたのだが、とうとうきてしまったか、と目を遠くする。

「お前の名前の由来はだ……」

翔平の名前を考えた日のことを思い出しながら、俺は重々しく口を開いた。

飲み込むたびに上下する喉仏。唇の端から飲み込みきれなかった滴が伝っていく。喉元を通り過ぎるアルコールと炭酸に気分がどんどん浮上する。一気に飲み切ったところで、ダンッ、と叩きつけるようにしてテーブルにグラスを置いた。

「カーツ、やっぱ久しぶりの酒はうまいぜ！」

歓喜の声を上げる俺に、周りのやつらが笑う。

「忙しかったから飲みに行く暇もなかったもんなー」

「松田と萩原は機動隊だったな。どうだ？」

気持ちにはよくわかる、と萩原がしみじみと頷きながら酒を置く。それに班長が笑いながら問いかけた。仕事終わりの生ビールはやっぱり最高だな、としみじみと思いながら俺は二人の方を向き、久しぶりに向き合った面々の顔を眺める。

「爆弾処理班ってことは、あの防護スーツ着てるのか？」

降谷の言葉に俺と萩原がそろって顔をしかめた。現在の防護スーツはレンズ曇り除去用呼吸冷却兼用のダクト付きヘルメットに、爆発による熱風から身を守るため寸分の隙間もない構造。さらに各所のポケットには金属製の防護版を収納している。重量は四十キロと大掛かりな装備なため一人では着脱は無理という代物だ。

「あの防護スーツだけはないわ」

げんなりしながら言った萩原に深く頷く。防護服の中は冬でもサウナ状態という、地獄のような代物だ。訓練でも着用させられるが、夏場は爆弾処理どころではなく、こっちが脱水で死にそうになる。

「でも、爆弾から身を守るための重要な装備だぞ」